

# 被爆ピアノ 平和考えて

## 八学短大、胎内被爆者ら招き講演会

八戸

八戸学院大学短期大学部幼児保育学科は10月26日、1945年に原爆被害に遭った「被爆ピアノ」を修復、管理しているピアノ調律師矢川光則さん(70)＝広島市＝と、胎内被爆者で県原爆被害者の会の藤田和矩会長(76)＝八戸市＝を招き、同市の八戸ポータルミュージアムはっちで講演会を開いた。広島市で被爆したピアノに合わせて演奏や歌も披露し、1年生約90人が平和について考えた。(野村遥)

被爆2世の矢川さんは現在被爆ピアノを7台所有し、全国各地でコンサートを開催している。矢川さんは「被爆して77年たってもまだ元気な音が出て、命の尊厳を伝える役目を果たした」と話した。

両親が爆心地から約1・5キロの広島市内で被爆した藤田会長は46年3月、腕や足がただれた



被爆ピアノの音に合わせて賛美歌を歌う学生たち

## 学生演奏、歌も披露

状態で生まれ、母親は出産半年後に原爆症で他界した。藤田会長は4歳まで歩けなかったことや、母の写真を肌身離さず持っていることなどを明かし、「どんなに裕福で愛に満ちた生活を送っていても、戦争が始まれば全てが無になる。若い人たちはもっと原爆や戦争について知る必要がある」と訴えた。

2人の講演の前に、学生たちは被爆ピアノに合わせてハンドチャイムの演奏や賛美歌の斉唱を行った。被爆ピアノを弾いた関川美憂さん(19)は「たぐさんの人の思いが詰まっているピアノだと感じた。普段弾いているピアノと全然変わらないきれいな音色だった」と話した。